

主 日 礼 拜

～平和初めて知った～

[illegible]

「隠された神の真実」

～愛の土台となる信仰。そして、そこに隠された神の真実～

「このような苦難の嵐でも、動揺する者が1人もいてほしくない。みんなの知っているとおおり、私たちは苦難をとおる運命だ。私がそちちにいたころ、いつか苦難が訪れると警告しておいたことが現実となった。…。教会のみんな。身も心も押しつぶされそうな困難と苦しみの中にありながらも、みんなの忠誠心相変わらずだと知って、ほんとうに励まされた。イエス様への強い信頼を保つなら、人生は最高だ。」テサロニケ人への第一の手紙3章3・4、7・8節〔アライヴ訳〕

イエス様は山上の説教の冒頭、「こころの貧しいものは幸いである」とおっしゃいました。また、「あなたがた満ちたりている者は災いである」ともおっしゃいました。

私たち人類は自分たちの生活が満ち足りるようにと願ってどんどん豊かになり、幸せを手に入れたかのように感じているのですが、実は現実はそうではないのではないかと感じるがあります。イエス様がおっしゃったことは本当に真理であると感じ始めています。子どもたちのアニメを観ても、「ドラえもん」を観ても、子どもたちは喜んで、満足してしまいます。その満足する心が真実であると感じるからです。しかし、その感じ方ばかりになると、いつの間にか人間の心は麻痺していくように感じます。私たちの日常生活で満足すればするほど、間違った価値観で満たされていくのではないかと思います。そして、時に、人生で危機的な、問題に出会う時に、自分は本当にどうなってしまったのか？と途方にくれます。しかし、それはただ単に神の真実を見せられただけで、全く特別なことではなかったのかもしれないのです。

パウロはこの第一テサロニケ3章で「わたしたちは患難に会うように定められているのである（3節）」と語り、また、第一コリント10章でもパウロは「あなたがたの会った試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実なお方です。（13節）」と語りました。また、イエス様もヨハネ16章で「あなたがたはこの世にあっては悩みがあります（33節）」と語りました。

聖書では、「患難」「試練」「悩み」「心配」という言葉は多く書かれていますが、それがその時具体的にどんな内容であったのかということはあまり表現されていません。また、「弱さ」とか「病」とか書かれていてもそれがどんな内容であったのかも具体的に書かれていないことが多いように感じます。それは、どんな試練にあったかということ、どんな病になったかということはあまり重要ではなく、私たちの人生で神の真実はそのにあることを決して見失ってはいけないということではないかと感じます。

欠けだらけ、問題だらけ、病だらけである私たちの人生にこそ、神の栄光が現されることも神の真実であることを決して見失ってはいけないと思います。そこにも豊かな神の希望があるのです。テサロニケの人々に対してパウロも彼らの信仰を心配しました。しかし、彼らは見事にその信仰に堅く立って、それを土台として、主を愛し、人々を愛していたのです！